

令和元年八月一日発行 第二十九巻第八号 通巻第三三八号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

岡井省二創刊

令和元年8月号

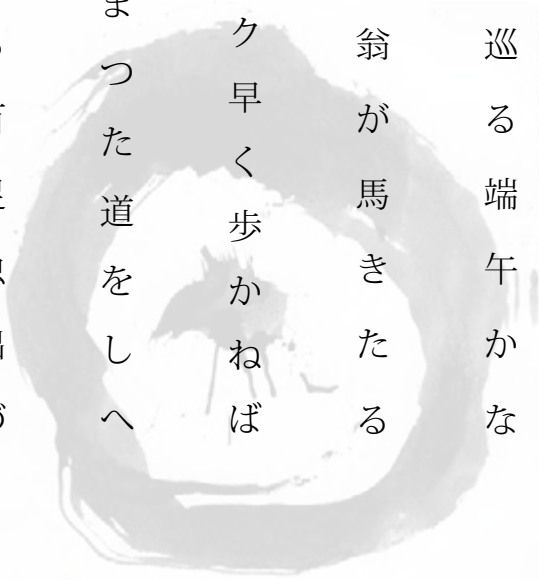


百足虫

高橋将夫

玩具みなどこかが壊れ子供の日
樽酒の樽に沁み込む新樹光
新樹光大河に乗って流れをり
ここだけの話を聞いてをる守宮

薔薇に棘なければ摘む気にはなれず
行き場なき想ひ蛍となりにけり
鯉に乗り宇宙を巡る端午かな
雲の峰越えて塞翁が馬きたる
ゴールデンウィーク早く歩かねば
蜜の味知つてしまつた道をしへ
情報の渦の中から百足虫出づ



椀賞受賞作品二十句

平野多聞

虚と実の折り合ひつけし遍路かな
身の内のどこかが軋む半仙戯
青き踏みすつぽり我を抜けしもの
恋の猫髭の先まで焦がしをり
蟻の道利他円満の妙位かな
老い筆れは浄土の蓮となるつもり
泣いて出て笑うて消ゆる虹の橋
仏法僧迷ひの窓の錆やすし
風死すや珊瑚に突き刺す星条旗
たちまちの白き花びら鱧湯引

閻魔王普通に開く釜の蓋
秋夕焼核のボタンは金メッキ
渡る鳥非武装地帯を畴とす
加へたし婚の荷物に満月を
雪搔いて建て付け悪き手足かな
白菜を剥くがごときの法話かな
寒明やひかりのかたち座る鹿
黄道を巡りて喜寿の大旦那
宝舟貧乏神の隠れをる
虚仮の世も報恩謝徳の初笑

槐安集

水野恒彦

宇宙ゴミ唐獅子のあくび大きくて
永却と刹那のながき冬銀河
人の生きる高さをこえて桐の花
万物の動かざるとき蟬の声
大夕焼海を歩いてゆけるさうな

加藤みき

一斉のみどりだんだん息苦し
夏鶯とくに瀬音のやんでぬし
ぼうたんの音なく崩れ美しきやし
ふんはりと抱かれてあたり昼寝覚
葉降る野生のものつやつやと

中島陽華

鳥曇りつつや金継ぎのマグカップ
春闌くや肉焼いてまた肉焼いて
花雲や熊野を下る市女笠
目を閉じて恋ふらく櫻月夜かな
ほろほろと卒寿の皺に甘茶の香

竹内悦子

神は猪かりんの花のぼつぼつと
寝転べば空はキャンパス青もみぢ
行き先は六地藏なり燕来る
薔薇の湯に首あづけし昼の月
掛軸は般若心経菖蒲の夜



雨村敏子

葉櫻の風運びくる令和かな
海牛に大きき空あり夏来る
水門の水送る立夏なり
くれなゐの榎植の幹や祭笛
繋ぐもの継ぎゆくものや青簾

本多俊子

心澄む日の夏蝶の白さかな
山からの光をあびて卯月かな
たましひに文体あり白牡丹
どくだみの花遠い日は還らず
観音の十指にかよふ夏の風

近藤喜子

箏筒より水色の初夏とり出しぬ
藻の花や水面いま光の器
うら若き山霊よぎる青嵐
草笛や過去からの音きいてゐる
なめくぢの引きずつて来る雨催ひ

瀬川公馨

神神の哄笑たりき藤の花
十二單の光を反芻してゐたり
木上にてフレンチカンカン栃の花
落人の茅花の原に紛れたる
走り梅雨女の喪服くたれたる

柳川 晋

夏暖簾に似合ふ人だけ通りやんせ
ツイートもラインもやめて端居かな
ガラパゴス風のホンコンシャツなりし
鎖場石鐘山に浴衣の役行者かな
竹婦人のボディー直して寝そびれし

熊川 暁子

花菜畑 自由な光集まれり
野も山もサラダにしたし新樹光
拝金の世相をうれふ小判草
青もみぢ空に小紋の氣息あり
近江路の天を降ろして田水張る

江島 照美

サルビアの緋のタンゴ舞ひ狂ふとき
利休梅花も序列をつけらるる
袋角その中にある秘密かな
羅を纏うて違ふ顔を知る
平和への法王のキス聖五月
フランススコ法王

寺田 すす江

借景のかすんでゐたり杜若
白昼の闇に吞まるる青蜥蜴
令和かな筍流し昨日けふ
天道に日の流れをり山法師
潮仏卯月の波に噎びたる

岩下芳子

なめくぢり一筆書きの銀のすぢ
捕虫網風も雷魚も掬ひけり
枇杷を掬ぐ枇杷の産毛の美しく
来てみればなんじやもんじやの花盛り
蝸牛生まれながらの左巻き

有松洋子

薰風や車両に手話の指弾む
遠く来し風の憩ふや薔薇の園
雨の日の空を独占夏つばめ
子は今を親は未来を子供の日
病葉落ち広がり止まぬ水輪かな

岩月優美子

夏蜜柑たわわに成つてゐる平和
初夏や令和の響き清々し
子の夢の無限大なりラムネ玉
散り際の牡丹乱心かも知れぬ
何が何でも登ると言ふ蝸牛

近藤紀子

最草の花に衿侍を見つけたり
晩節の思ひとち込む螢袋
櫻湯のほろりとほどけゆきしかな
爪半月なき爪先や水中花
黄泉比坂で帰すや道教へ

竹中一花

梅みくじ吉か凶かと目高の目
木の猪に銀杏青葉の風の色
白龍の社を隠す青もみぢ
橘や平安人の袖香る
刀匠の腕に夏風令和晴

前田美恵子

指先の湿つてゐたる更衣
鉄塔の突き破りたる楠若葉
退院を知らせる電話明け易し
清貧の部屋を出でたり田水張る
特産物の試食の列や夏帽子

中田禎子

人誘ふ牡丹一鉢ありにける
栗の花縄文人の駆けし森
空と海青々として巢立ちかな
群れ離れ天頂めざす鯉のぼり
日輪を吊り上げ烏柄杓かな

吉田順子

湿原の空の水色夏立てり
咲き満ちし香をひと色に薔薇の風
海境や五月の空を押し上ぐる
夏霧の晴れし三河の峡深く
白の好き紫さらに花菖蒲

槐市集

阿部さちよ

春雨や検査結果を妻へ告ぐ
真珠婚いろいろ混じる蜆汁
新樹光浴ぶるふた身の真珠婚
風ともす道の明かりの落花かな
新代あちもきつと生きんと糸柳

出利葉孝

ぼつかりと五月の底は楽屋裏
埋つくす坑道口は青芒
若竹や空の広さを目の当り
筍の天鷲絨皮に神戸牛
新緑に地下道口が塞がれり

犬塚李里子

天つちの漂ふ匂ひ走り梅雨
花は葉に過ぎし日なべて美しき
余力あるときが退きどき夏蓬
現し世の波風知らぬ水中花
青葉木菟地球の闇を廻しをり

井上静子

精霊の牛の尻撫ぜ風薫る
榎植青葉狛いのししの親子かな
一本のカーネーションを持つ翁
畑掘つて出でし蛙と目を合はす
蚕豆の英を飛び出し青春を



今井 充子

ちらちらと木蔭を抜ける薄暑光
涼風や学舎のチャイム風に乗り
安らげし夏鶯の谷渡り
夏めきてポストンテリヤ跳ねまはる
手を翳し小雨の中を麦の秋

岩田 洋子

雑草の風きらきらと夏の朝
点滴のゆめにうつつに合歓の花
コミツク本並んでゐたり走り梅雨
山裾に一休寺あり齒朶若葉
新緑や修道院の窓高き

植木 戴子

熨斗袋三つ揃ふや立夏なる
牛の頭を撫でてをりけり蓮の花
みちのくや若葉の風吹いてをる
葉桜や大甕の蓋開いてをる
万緑や雨しとしとと土匂ふ

大塚たきよ

初夏のテニスコートに球の音
万緑や谷を流るる瀬音かな
摂津峡の風に吹かれし鯉幟
鴉の子カーブミラーに体当り
初夏の風藍ののれんの揺れてをり

岡田 桃子

薫風を浴び地下鉄の地上駅
洋館へ誘ふ薔薇と車寄せ
大食堂マントルピースの石涼し
侯爵邸の出窓のカーブ芝青し
ステンドグラスの窓に遅日のスマホ繰る

荻 布 貢

御代替る令和寿ぐ清和かな
古沼ぬまや音なく滑る水馬
大国のチキンレースや夏の陣
島影や船また船の瀬戸の夏
夏めく古刹の階石畳

槐集

高橋将夫選

聖五月森の匂ひの香水瓶 大阪 藤田美耶子

空転の国会にらむ鯉のぼり

ため息を空にはなてりしやぼん玉

傾ぐとも己信じる花あやめ

桐の花ビルの谷間に色の風

鯖包む紙に令和の大活字 守口 三木 亨

匂ひたつ若葉の色にたぢろげり

鯉のぼり躍る命のかいま見え

折りたての甲ぶかぶか柏餅

草笛を吹いて令和を行進す

忽ちの白き花びら鱧湯引 大阪 平野 多聞

徘徊の鯛や鯉の日永かな

身の内のどこかが軋む半仙戯

義仲寺の芭蕉は初夏の日に咲ふ

むくむくと山膨らみぬ椎若葉

名物の穴子を女将そつと出し 芦屋 田中 信行

メーデーやソ連を知らぬロシア人

平成と令和をつなぐ緑雨かな

出口なきジグザグ道の暑さかな

世界史を揺らし躍らせチューリップ

緑たつ榎植の幹の艶やかに 枚方 中 貞子

葉櫻や産湯使ひし井戸のあと

真清水を含み神代の武勇伝

御遺愛の石燈籠の涼気かな

狛猪のおほきな眼薄暑光

吹く風に待つたをかけし虞美人草 竹原 久保 夢女

この棘も神のみこころ花うばら

五月晴れ角の取れたる石一つ

胡瓜揉み苦い涙も一しづく

不意突かれ嬉しきものに夏鶯

銀河往來

◆槐集観照

聖五月 森の匂ひの香水瓶 藤田美耶子
香水瓶の「森の匂ひ」がいい。香水は匂いがきつすぎて好きでない人もいる。しかし、森の匂いの香水なら誰にでもやさしい。聖五月にびつたりと思う。

〈空転の国会にらむ鯉のぼり〉へため息を空にはなてりしやぼん玉〉〈傾ぐとも口信じる花あやめ〉〈桐の花ビルの谷間に色の風〉、どの句にもこの作者ならではの視点と表現がある。

鯖包む紙に令和の大活字 三木 亨
鯖を包んだ新聞紙か何かに「令和」の文字が大きな見出しで印刷されている。実に生活感のある改元の句。

〈草笛を吹いて令和を行進す〉の句は吹奏楽でなく草笛を吹いての行進。これもまた改元を身近に感じさせてくれる。

身の内のどこかが軋む半仙戯 平野 多聞
ぶらんこを漕いでいたら、鎖か何かが軋む音がしたのであるう。まるで身の内のどこかが軋むように感じたという。ぶらんこに乗っても、もう若い頃のようにはいかない。
〈忽ちの白き花びら鱧湯引〉はまことに美しい。

メーデーやソ連を知らぬロシア人 田中 信行
ソ連が崩壊してロシア連邦になったのは平成3年。共産主義の衰退からずいぶん時が流れた。ソ連を知らない世代も増えて

いるわけだ。昨今のメーデーを見てふと共産主義が盛んだったころに思いを馳せているのだろう。

〈世界史を揺らし躍らせチューリップ〉も目は世界情勢に向けられている。

真清水を含み神代の武勇伝 中 貞子
清水を口に含んで神話の時代の武勇伝を思い浮かべたという。武勇伝というからには、どこか謂れのある場所の清水であろう。日本武尊などいろいろ想像してみるのも楽しい。

この棘も神のみこころ花うばら 久保 夢女
美しいものには棘がある。棘があるのは茨の花が意地悪だからなのか。いや、これは神のみこころ。茨の花に罪はない。

ハンカチも十色あるなり思ひもまた 柴田 靖子
人の思いは勿論さまざま。十色のハンカチを見て改めてそう思う作者の感受性に共感した。

一円を拾い手渡す子の五月 中西 厚子
一円でも拾って親に手渡す。子供は正直だ。端午の節句の五月にふさわしい一句。

三時代生きて令和の柏餅 竹村 淳
令和に変わった五月。昭和、平成、令和と三時代生きることになるんだとしみじみ思いながら柏餅を食べている景。柏餅が改元にふさわしく思えてくる。
〈以下略〉